

観賞用花木の輸出における品質管理体制の構築

—山形県の啓翁桜を事例に—

佐藤 敦信・濱島 敦博

Establishment of a Quality Control System for the Export
of Ornamental Flowering Plants:
Case Study of Cerasus ‘Keio-zakura’ in Yamagata Prefecture

Atsunobu SATO, Atsuhiro HAMASHIMA

要 約

日本産花きの輸出は、輸出先市場のニーズに応じたプロモーション活動の成果もあり、これまで拡大傾向を示してきた。本稿では農協による山形県産啓翁桜の輸出に焦点を当て、管内の生産者による品質管理体制の構築要因とその体制による輸出先市場のニーズへの対応の課題を考察する。事例とした JA 庄内みどりでの啓翁桜の輸出継続に関する取り組みをみると、園芸課だけではなく、啓翁桜の生産にとりわけ豊富な経験と知識を有する花き部会の花木専門部長も品質チェックで重要な役割を果たしている。JA 庄内みどりは、生鮮の切花及び花芽（その他のもの）の輸出額が多くかつ春節需要がある香港とベトナムに向けて輸出しており、近年の 1～2 月期においては JA 庄内みどりのみで同品目の香港・ベトナム向け輸出額全体の 1～2 割弱を占めている。このことから、JA 庄内みどりの取り組みは日本産花きの輸出動向に大きな影響を与えていると推察される。高品質品が求められる花きの安定的な輸出では、JA と花木専門部長のような高い栽培技術を有する生産者が連携し品質を担保するとともに、高い栽培技術を有する生産者を育成し、今後の突発的あるいは長期的な輸出増、輸出先市場での品質面でのクレーム対応に備えていく必要がある。

キーワード：啓翁桜、品質管理、香港

1. はじめに

日本産花きの輸出は、輸出先市場のニーズに応じたプロモーション活動の成果もあり、これまで拡大傾向を示してきた。こうした動きの背景には、国内花き市場をみると頭打ちが続いており、経営の安定化を図るうえでは、内需のみならず外需も獲得する必要に迫られていることがある。

農林水産省（2024）でも示されているように、食生活の範囲内で選択される野菜や果物と比較すると、花きの用途は冠婚葬祭や贈答、装飾といったように多岐にわたり、消費者の用途や場面により用いられる花きの種類・品種などが異なることから嗜好性が高い品目と言える。また、農林水産省（2020）では、輸出の促進にあたり、産地における輸出に対応した栽培体系の確立などが重点課題として示されている。そして、日本国内産地が花きの輸出拡大を図る上では、輸出先市場での需要に合わせた品質の花きを出荷し、PR 活動やフォローを通じて輸出先市場での需要の創出や囲い込みをすることが求められる。

そうした中で、日本国内の川中や川上での輸出に対する取り組み課題は一部の研究成果ですでに言及されている。前者については、程（2005）が卸売企業における中国への輸出過程に内在する課題や同国での PR 実態を整理している。また、後者については、石塚（2012）が岩手県八幡平市における輸出向けたりんどうの品種開発と国際商標登録による品種の保護といったブランドイメージの確立のための取り組み実態を明らかにしている。ただし、こうした研究成果では、花きの品質保持と向上に関する生産者の取り組み実態については十分に論じられていない。これまで花きの輸出においても、長距離輸送に耐えうる品質管理技術の向上の必要性が指摘されてきており、それに対してコールドチェーンの普及など物流面の対策が講じられてきた（農林水産省（2024））。他方、生産面をみれば、生産者の栽培技術の高低による花きの品質面でのばらつきの解消や、輸出先市場のニーズの生産者間での共有が求められている。こうした面での産地側の対処は、高規格品を求める輸出先市場で重要な課題になると考える。

嗜好性の高い品目であることを踏まえれば、輸出先市場が望む花きの品質を保証することで、輸出先での需要を安定的に囲い込むことが求められ、そこでは産地組織による品質管理も必要になろう。品質管理の一つの方法として、生産者間での情報交換や栽培技術の共有、規格や品質基準の一律化などが挙げられる。JA の部会組織は、それらの機能を有しており、上述した輸出先市場のニーズの共有やそれに基づく品質面での対応を明らかにするためには、JA の部会組織の取り組みに注目する必要がある。

以上から、本稿では JA 庄内みどりによる山形県産啓翁桜の輸出に焦点を当て、その海外向けの品質管理の実態を把握することにより、産地組織が輸出先市場のニーズに対応した高品質な花きを輸出できている要因を明らかにし、花き産地に求められる品質管理体制のあり方について考

察する。なお、本稿の JA 庄内みどりを中心とする輸出の取り組みに関する記述は、2022 年 9 月に実施した同 JA の花き担当職員と花き部会花木専門部長（以下、花木専門部長と表記）へのヒアリング調査に基づく。

2. 切花及び花芽輸出の概況

切花及び花芽全体の 2022 年時点での総輸出額 15 億 1,428.6 万円のうち、生鮮の切花及び花芽の輸出額は 12 億 6,044 万円である⁽¹⁾。その品目の内訳をみると、ばらやカーネーション、らん、菊、ゆりを除いた切花及び花芽（その他のもの）が 99.6%（12 億 5,586.8 万円）を占め、本稿が対象とする啓翁桜もこの項目に含まれる。生鮮の切花及び花芽（その他のもの）の総輸出額は 2011 年に 6,278.2 万円であったことから、近年、急増していることが分かる。主な輸出先をみると、2022 年時点で中国が 6 億 8,216.2 万円、米国が 2 億 6,985.5 万円、香港が 7,185.3 万円、韓国が 7,139.9 万円、台湾が 5,224.7 万円、ベトナムが 5,119.9 万円となっている。近年中国向けの伸長が大きく、中国の花き消費の成長が切花及び花芽の輸出拡大を強く牽引してきたが、その一方で従来から輸出額の多かった米国や香港の他、ベトナムへの輸出も順調に拡大している。

輸出時期と輸出先に着目すると中国向けと中国以外の地域向けでは異なる傾向を示す。表 1 は、2020～2022 年における生鮮の切花及び花芽（その他のもの）の輸出額を四半期別の割合で整理したものである。まず、輸出額全体の割合をみていくと、1～3 月期の輸出額が 3 か年とも通期の約 4 割を占めている。地域別では、中国向けが各四半期とも平均的に輸出されているのに

表 1 生鮮の切花及び花芽（その他のもの）輸出額の四半期別の割合

単位：%

	2020年				2021年				2022年			
	1～3 月期	4～6 月期	7～9 月期	10～12 月期	1～3 月期	4～6 月期	7～9 月期	10～12 月期	1～3 月期	4～6 月期	7～9 月期	10～12 月期
全体	41.9	27.0	17.5	13.5	35.9	25.4	19.2	19.5	40.7	23.0	17.4	18.9
中国	10.8	42.3	29.9	16.9	21.9	31.6	26.8	19.7	27.1	25.2	27.7	20.1
米国	87.6	0.0	2.0	10.4	55.5	13.0	11.2	20.2	60.7	17.1	6.3	15.9
香港	61.9	28.5	5.5	4.1	64.3	21.1	6.6	8.0	62.9	25.9	2.0	9.1
韓国	54.5	30.1	1.5	13.9	46.5	13.2	3.0	37.4	61.1	13.8	1.6	23.5
台湾	20.4	57.5	6.4	15.6	30.0	27.7	7.6	34.6	33.2	30.5	9.2	27.1
ベトナム	96.7	1.9	0.0	1.4	69.2	25.2	2.5	3.1	60.9	30.0	2.8	6.3

註 1：本表は統計品目番号 0603.19-000 の数値を抽出したものである。統計の制約上、啓翁桜のみを抽出することが困難であり、数値は生鮮の切花及び花芽（生鮮のもの及び乾燥し、染色し、漂白し、染み込ませ又はその他の加工をしたもので、花束用又は装飾用に適するものに限る。）の中で、ばら、カーネーション、らん、菊、ゆり（リリウム属のもの）を除いたものになる。

註 2：本表の数値は小数点以下第 2 位を四捨五入しているため、各国・地域の合計値が必ずしも 100 になるとは限らない。

資料：財務省「貿易統計」より作成。

対し、米国や香港、韓国、ベトナムなど中国以外の国・地域への輸出は春節期間を含む1～3月期に集中する傾向にある。例えば、2022年の総輸出額に占める同期間の割合は、中国向けが27.1%と通期の四分の一程度であるのに対し、米国は60.7%、香港は62.9%、韓国は61.1%、ベトナムは60.9%と高い割合を示している。

以上から、海外市場において日本の切花及び花芽の季節需要が発生していることに着目し、輸出が集中する期間の輸出実態を明らかにすることは、わが国の切花及び花芽の輸出促進を図る上で重要であると考ええる。さらに、輸出時期が1～3月期に集中する国・地域と集中しない国・地域が併存していることから、輸出実態を明らかにするためにはそれらの国・地域を分けて検討する必要がある。本稿では、まず、輸出時期が集中する国・地域を対象とすることとし、香港及びベトナム向け輸出を事例としたい。

3. JA 庄内みどりにおける啓翁桜の生産及び輸出状況

3-1. 啓翁桜の生産状況

農林水産省「花き生産出荷統計」によると、生産者の高齢化とそれに伴う規模縮小などの要因により、花き総出荷量は1996年の57億5,600万本をピークにその後減少傾向が続き、2022年には31億3,900万本になっている。ただし、山形県は2022年に6,210万本となっており、2000年以降、出荷本数が横ばいになっていることから、わが国での総出荷本数に占める山形県産の割合は高まってきたと言える。

2021年の「山形県花き振興計画」で、啓翁桜は、山形県の花き生産において主要品目と位置付けられている。啓翁桜は花木類に属し、山形県を中心に商業的に栽培され、花芽が付いた切り枝として販売されている⁽²⁾。啓翁桜の栽培スケジュールは概ね、4月の施肥と消毒、5月の環状剥皮と除草、9～10月の追肥、11月中旬以降の枝切りと休眠打破の処理、促成管理などで構成される。促成管理については、40℃の温湯処理を1時間した後、各生産者が所有している促成室で20日～1か月温度と湿度が管理される。そして、11月には予約相対取引が始まり、当年度の凡その注文数が判明する。このようにして開花時期を早めることで啓翁桜は需要が伸びる12月中旬から3月下旬までの出荷が可能になる。

「山形県花き振興計画」では、県内の中でも東根市、西川町、酒田市で主に生産されていることが示されるとともに、①新規栽培者の確保・育成と団地化への誘導による面積の拡大、②消費PR活動による知名度の向上の2点を今後の振興方向として据えていることが明記されている。また、出荷量の増加を図るため、既存生産者の生産性向上の推進や栽培技術の改善と普及の必要性も盛り込まれている。この計画では、啓翁桜がJA部会による共選共販で出荷されている現状も記されており、啓翁桜の輸出への対応も含めた出荷体制の構築においては、部会組織の取り組みに注目することが重要であると言える。

表2 単協別でみた2022年度の山形県産啓翁桜の出荷額と数量
単位：万円、万本

単協名	出荷額	出荷量
JAさがえ西村山	6,161.5	41.3
JA山形おきたま	4,551.3	23.0
JAやまがた	4,042.3	19.5
JA庄内みどり	2,602.8	17.8
JAさくらんぼひがしね	2,301.5	11.0
JAみちのく村山	823.3	6.4
JAてんどう	108.8	1.3
JA庄内たがわ	31.0	0.2
JA鶴岡	7.4	0.0
その他	44.3	0.3
県内合計	20,664.1	120.7

註：本表の数量は2～3本を束ねたスリーブと1本長物などの合算値である。
資料：JA 庄内みどり資料より作成。

本稿が対象とするJA 庄内みどりでは、1970年代に啓翁桜の栽培が始まり、その後、露地栽培の減少に伴う耕作放棄地の解消及びメロンなどが生産される庄内砂丘の土壌改良、稲作農家などでの冬季の収入源の確保を目的として管内での啓翁桜の栽培が拡大してきた⁽³⁾。また、主産地である酒田市が管内に含まれていることから、花きの取扱品目で啓翁桜をトルコギキョウやストックとならぶ重要品目として位置づけている。

表2は単協別でみた2022年度の山形県産啓翁桜の系統出荷額と数量を整理したものである⁽⁴⁾。市場外流通を含むJA 庄内みどりの出荷額は2,602.8万円であり、山形県の総出荷額の12.6%を占めている。

同JA 花き部会の部会員は112個人と3出荷団体で構成され、栽培品目は啓翁桜をはじめとする26品目で、専門部としてストック専門部、切花専門部、ケイトウ専門部、トルコギキョウ専門部、花木専門部があり、啓翁桜は花木専門部に属する。啓翁桜を生産するのは17人で、生産面積は25haである。その中には、1名の花き部会花木専門部長がいる。

3-2. 啓翁桜の輸出状況

2022年度のJA 庄内みどりの市場出荷額は2,502.1万円であり、そのうち、国内向けが1,826.8万円、輸出向けが675.3万円である。主な出荷チャネルを金額ベースのシェアで見ると、東京都中央卸売市場大田市場（25.7%）、世田谷市場（11.8%）を中心として計13箇所の各地の卸売市場に出荷しているほか、花き卸売業を営む株式会社オークネット・アグリビジネス（以下、オークネットAGと表記）に45.2%を出荷している⁽⁵⁾。

輸出向けは、JA 庄内みどりの市場出荷額の27.0%を占め、海外市場が重要な販路となってい

ることが分かる。また、輸向けのうち春節用に向けた輸出額は615.9万円であり、日本の1～2月期における生鮮の切花及び花芽（その他のもの）の香港・ベトナム向け総輸出額6,447.1万円の9.6%を占める。なお、2020年の同割合は17.5%、2021年は10.6%である。このように、JA庄内みどりの輸向け啓翁桜は春節需要に合わせた出荷体制を構築しており、その輸出額は、1～2月期において香港・ベトナム向けの輸出全体の1～2割弱を占めているのである⁽⁶⁾。

JA庄内みどりは2011年から啓翁桜の輸出を開始した。その契機になったのは、オークネットAGから香港への輸出を打診されたことによる。1985年に創業した親会社の株式会社オークネットは、2000年に花きオークションサービスを開始したが、外需の伸びが顕著になったことから、自社がもつ香港への販路を啓翁桜の輸出に活用することを検討したのである。現在のところオークネットAGを介して啓翁桜を輸出しているのはJA庄内みどりのみである。オークネットAGはマカオの宿泊施設に花きを卸している香港の輸入業者と取引関係にあり、JA庄内みどりが同社にサンプルとして165cmの秀品1箱を出荷したところ好評を得た。これを契機に輸出が継続することになる。

さらに、JA庄内みどりは同様にオークネットAGからの提案で2017年からベトナムへの輸出を開始した。香港に次ぐ輸出先の開拓及び選定には、JA庄内みどりが輸出においても山形県内の他産地との競争を回避し棲み分けをするという方針が反映されている。現在に至るまで、JA庄内みどりの啓翁桜は香港とベトナムともに全量オークネットAGを介して、成田空港から航空便で輸出されている。各輸出先では、輸入業者を通じて宿泊施設や花き販売店に販売されている⁽⁷⁾。

3-3. 啓翁桜の季節需要

日本国内をみれば、啓翁桜は卒業式や入学式などの式典用や小売店での展示用としての需要が最も多い。その一方で、輸出では、啓翁桜の需要は春節時期に集中する。JA庄内みどりの主たる輸出先である香港では、春節の装飾用品として花き類の個人需要が高く、香港政府の管理のもと、春節直前に1週間限定で、「年宵花市」と呼ばれる花き類の屋外小売市場が数か所で開催される。啓翁桜もその花市で販売されている他、近年では一般の花き小売店や日本食品を扱うスーパーマーケットでも販売されるようになってきている。なお、2023年1月下旬の小売価格帯は1本当たり80HKDから120HKDであった⁽⁸⁾。

4. 輸出品の規格と品質管理の重要性

JA庄内みどりで啓翁桜の規格は、切り枝の長さで165cm、150cm、125cm、100cm、90cm、80cm、70cm、60cmと、予想される開花時の外観などで秀品、優品にそれぞれ区分される⁽⁹⁾。2022年期での本数ベースでみた秀品の割合は88.0%である。また、JA庄内みどりで、花芽の

付き具合からみた切り枝全体のバランスが整っている 125cm の生産を指向してきた。

表 3 は JA 庄内みどりで各規格の市場出荷額とそのうちの輸出向けを整理したものである。規格に関しては、総出荷額に占める 125cm の割合が 55.5～61.3% となっており、各規格の中で最も多い⁽¹⁰⁾。そして、輸出向けをみると、125cm は 75.8～82.1% を占めており、その重要性がより高くなる。さらに等級をみると、国内には秀品と優品双方が出荷されているのに対して、輸出向けは秀品のみである。輸出開始当初から秀品の中でもとりわけ外観が良いものを輸出しており、輸出向けは国内向けに比べて高品質品へのニーズが高い。

表 4 は輸出先である香港とベトナムの 1～2 月期の輸出額合算値を整理したものである。香港への輸出の割合は、2020 年期が 54.9%、2021 年期が 56.2%、2022 年期が 48.3% となっている。規格のうち枝の長さで多い 125cm の割合をみると、香港へは 95% 以上、ベトナムへは 50% 以上を占め、いずれの輸出先でも特定の長さへのニーズが高い⁽¹¹⁾。

輸出額が拡大傾向にあり、さらに、高品質品（上位規格）及び特定の長さ（125cm）へのニーズが集中していることを踏まえると、JA 庄内みどりの輸出事業では、数量を確保するとともに、輸出品の品質を担保することも重要になっていると考えられる。オークネット AG も自社が取り扱う啓翁桜の品質をチェックしており、品質を維持することは同社を介した輸出の存続に繋が

表 3 JA 庄内みどりの規格別市場出荷・輸出状況

単位：万円

規格	2020年期		2021年期		2022年期	
	出荷額	輸出額	出荷額	輸出額	出荷額	輸出額
165 秀	57	20	40	35	36	19
150 秀	-	-	-	-	1	-
125	1,459	446	1,077	481	1,242	506
	253		287		147	
100	100	-	37	-	91	-
	40		29		25	
90	373	116	260	118	347	91
	57		77		34	
80	209	-	115	-	218	-
	26		37		12	
70	138	-	75	-	137	-
	27		32		11	
60	134	-	108	-	183	-
	34		50		19	
合計	2,907	583	2,224	634	2,502	616

註：輸出額については 1～2 月期の数値である。

資料：表 2 と同じ。

表4 JA 庄内みどりの仕向け地別輸出額の推移

単位：万円

年期	香港		ベトナム		
	165cm	125cm	165cm	125cm	90cm
2020	10.4	309.6	9.6	136.8	116.1
2021	16.0	340.2	19.2	140.4	117.9
2022	8.0	289.8	11.2	216.0	90.9

註：1～2月期の数値である。

資料：表2と同じ。

る。

なお、輸出単価は、各年期とも165cmが800円、125cmが300円、90cmが180円であり、国内単価より12.8～76.4%高い。輸出単価と国内単価との差額に輸出本数を乗じて輸出による出荷額の増加分を算出すると、2022年期は、165cmが4万6,649円、125cmが138万8,504円、90cmが55万7,292円となる。これらの金額の合計値は、輸出に取り組んだ生産者にもたらされる。

5. 事例地における品質管理体制の構築

5-1. 輸出先市場での需要の喚起と対応

これまでJA 庄内みどりは、2016年に香港で、2020年にベトナムでそれぞれ1回ずつPR活動を実施している。その中では、現地百貨店で桜が日本を象徴する花であることや、日本人の桜の楽しみ方などを紹介してきた。

また、高品質品の消費が短期間に集中するという特殊な需要構造に対し、JA 庄内みど리では、輸出先での量的・質的要求に応え、信頼を獲得することを重視してきた。例えば、輸出開始初期において、輸出した啓翁桜の販売が想定以上に好調であった際に、香港の輸入業者から追加注文が発生することがあった。これに対して、JA 庄内みどりはオークネットAGと事前に追加注文に関する情報を交換することで、部会員の協力のもと予めストックを準備し、突発的に発生する量的要求に応える体制をとっていた。さらに、それでもなお不足する分については、JA 庄内みどりと花木専門部長が管内の他の生産者に協力を依頼し、追加注文分の数量を確保してきた。その際、花木専門部長は輸出向け啓翁桜の生産者に限らず他の生産者の産品も含めた中から輸出先が要求する品質に合うものを選別し輸出にまわした。以上より、輸出先の量的要求が、輸出向けを担う生産者が生産できる量を超えた場合は管内の生産者全体で欠品を回避するよう注力してきたことが分かる。

さらに、ベトナムでは花き商社と小売店でも営業活動を行い、併せて品質保持に関する注意点などの指導やクレーム対応もしている。ベトナムは北部と南部で気温が大きく異なり、南部では

2月や3月でも最高気温が30℃を超える日も多い。啓翁桜の出荷においては、開花のタイミングを見計らって開花前の蕾の状態出荷するのが一般的である。長時間輸送が必要なベトナム向けは、輸送途中での開花を避けるため、香港向けに比べて開花までの時間を長くとる必要があり、蕾がより閉じた状態で出荷されている。こうした対応は、輸送途中で開花するといった問題が発生した際に、JA 庄内みどりと花木専門部長が現地販売店において直接問題を聞き取りしたことが出発点となっている。そして、発生した問題は管内での輸出に関する説明会で輸出向け啓翁桜を出荷する生産者間で共有される。このようにして、輸出先市場の消費者の質的要求を満たすための取り組みを産地全体としてすすめてきた。

5-2. 輸出向け啓翁桜の品質管理

5-2-1. 啓翁桜がもつ開花時の不確実性

まず、高品質品を選別する仕組みを設ける必要性から整理したい。啓翁桜の規格は、枝の長さの他、枝の曲がり具合、花の数とつき方、開花するかどうかなど外観が判断基準となる。また、実際の選別においては、将来の開花の姿をイメージし、枝にバランスよく十分な花芽がついているかなどを判断する。他方、将来の開花時の姿を予測するという事後的な品質を判断する能力は個人によって差が生じ、啓翁桜の出荷は、出荷後の品質の高低に関して不確実性を伴う。さらに、輸出先と国内との気温差を踏まえると、輸出向けは国内向けに比べて出荷時期の調整を含めた品質管理がより重要になる。

5-2-2. 品質管理体制の構築

輸出先市場からの品質に関わる高い水準の要求に対応するために、産地側では JA 庄内みどりが中心となり、次のような品質管理体制を構築している。JA 庄内みどりは、輸出向けを出荷する生産者を限定することによって輸出品の品質を高い水準に維持する方針をとっている。上述した通り輸出品は、125cm 以上の秀品が中心となるが、輸出品を出荷できるのは、栽培経験年数が長く、同規格を安定的に生産できる5人あるいは6人の生産者のみである。

図1は啓翁桜の栽培スケジュールと各段階での JA 庄内みどりの品質管理に関する取り組みについて表したものである。こうしたスケジュールの中で、JA 庄内みどりは、環状剥皮と除草が終了する6月に輸出に関する説明会を開催し、11月中旬以降の出荷前の段階で品質をチェックする。

JA 庄内みどりは管内の全組合員に啓翁桜の品質向上の重要性や輸出の可能性を周知しているが、毎年開催される輸出に関する説明会に出席するのは技術をもち、かつ意欲がある生産者であり、各年でメンバーの変化はほとんどない。この説明会では毎年、春節に合わせた輸出時期も周知され、生産者はこれに基づき輸出向け啓翁桜を栽培し、出荷時期を調整することになる。2022年度の輸出に関する説明会は、2021年6月に開催し、管内の生産者やオークネット AG 担当者など20名が参加している。説明会では、JA 庄内みどり園芸課が、啓翁桜の生育状況とともに、

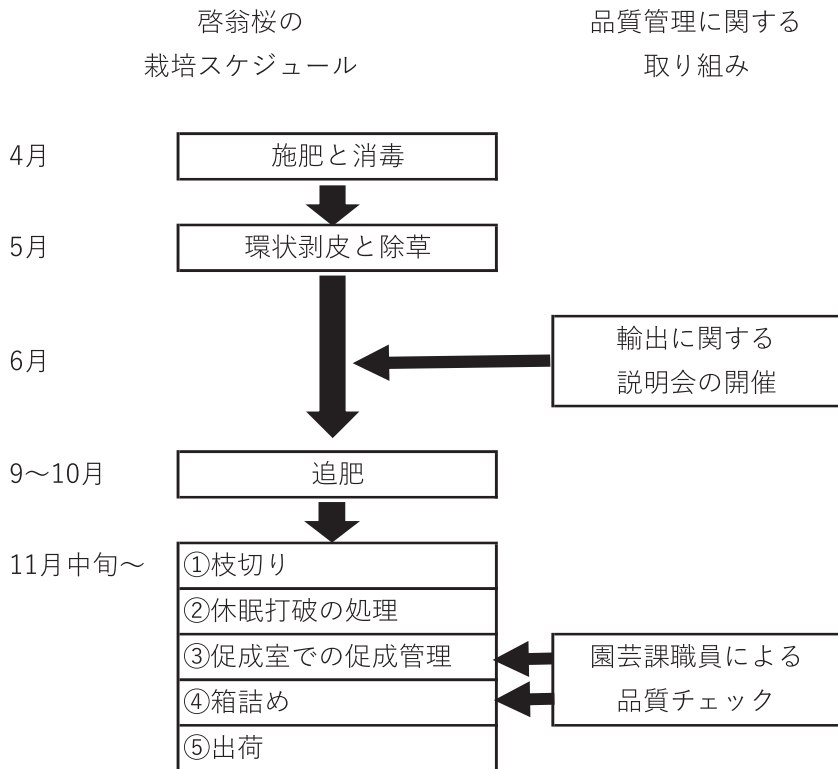


図1 啓翁桜の栽培スケジュールとJA庄内みどりの品質管理に関する取り組み
資料：JA庄内みどりへのヒアリング調査に基づき作成。

前年期の春節対応の結果を説明し、今後の春節対応の方針について確認する。特に、輸出向けの規格や品質については、生産者間で認識が異なる場合もあるため、説明会にて合意を形成するよう努めている。

さらに、啓翁桜の開花時の不確実性に対して、JA庄内みどりでは、園芸課職員が品質チェックを2回行っている。1回目は箱詰め前の促成室での保管時で、2回目は、部会員による個別の選別及び箱詰めを経て出荷される直前の段階である。

5-2-3. 品質チェックにおける花木専門部長の役割

JA庄内みどりの2回にわたる品質チェックにおいて、輸出向けは同JA園芸課職員だけではなく、花木専門部長も加わって目視によってチェックする。現在の花木専門部長は、他の生産者とは異なり生産品目が啓翁桜のみで、栽培経験も長い。このことから花木専門部長は、外観の基準に基づき他の生産者に比べて高い精度で品質を判断または予測することができ、輸出品の選別において最終的な決定権を持っている。なお、花木専門部長の父は管内で啓翁桜の栽培が始まった1970年代からその栽培に携わっており、管内での啓翁桜の栽培の先駆者であった。そして、花木専門部長は父とともに早い段階から栽培に携わり技術を継承してきた。実際に、最も高値が

つく 165cm の秀品を出荷できるのは管内では花木専門部長を含む 2 人のみである。さらに、啓翁桜の注文形態には、①単価の高い生産者指名買いの注文品と、②指名がなく単価の低い一般品の 2 つがあるが、花木専門部長はその栽培技術の高さから①による指名買いの注文もある生産者である。

5-3. 品質管理体制の構築要因と今後の課題

前項までで述べたように、JA 庄内みどりでは、定められた規格のなかで高品質品を中心に輸出しており、その品質管理は、説明会での生産者間による輸向向けの規格及び品質の確認と、出荷までの 2 回にわたる品質チェックによって担保されてきた。その中で、高い栽培技術を備え品質判断に長けた花木専門部長が大きな役割を果たしている。JA 庄内みどりの啓翁桜輸出における品質管理体制は、生産や栽培において豊富な経験と知識を有する人材を中心として構築されていると言えよう。

他方、2022 年時点で輸向向け啓翁桜の生産者は全員 50 歳以上であり、花木専門部長がその中で最も若く、新たな生産者の確保が求められている。先述した通り、「山形県花き振興計画」でも新規栽培者の確保・育成が指向されており、新たに啓翁桜の栽培に着手する生産者は増加傾向にある。ただし、そういった新規参入者は輸向向けの選別基準を満たす高品質品を栽培するには技術的課題を残している。総輸出額が 600 万円前後で推移し、輸向向け啓翁桜の栽培を担える生産者は増加していないことから、現状、JA 庄内みどり管内では量的要求への対応可能な上限に達していると考えられる。花木専門部長は、出荷前に開催される研修会で、他の生産者に対して、啓翁桜の結束方法や花芽のつき具合からみた切り出すべき枝の見分け方などを指導し、新規参入者の技術向上を図っている。花木専門部長をはじめ輸向向け啓翁桜を出荷できる生産者が限られていることを鑑みれば、品質向上への意欲が高い生産者への指導に注力し、輸向向け啓翁桜を出荷できる生産者を増やしていくことが求められよう。

6. おわりに

本稿では、輸先市場のニーズに対応した産地組織による品質管理体制の実態から輸出に取り組む産地で求められる品質管理のあり方を考察した。花きの中でも、本稿で事例とした啓翁桜は開花時に不確実性が伴う。輸先は日本とは気温が異なることなどから、出荷時期も考慮する必要があるという点で、産地側では国内出荷よりも厳格な品質管理が必要になる。そうした中で、JA 庄内みどりの取り組みは、次の重要な示唆を与えている。第 1 に、啓翁桜の生産では、国内のみならず輸先でも高い品質ニーズがみられることから、輸出に関する説明会の開催を通じて、高品質品を栽培できる生産者の限定と輸向向けの品質に対する了解が必要になる点である。第 2 に、国内出荷よりも品質管理で考慮すべき点が多くなる輸向向けでは、品質チェックにおい

てJA職員だけではなく、栽培経験が長く、高い技術を有し、規格選別の判断精度が高い花木専門部長も加えることで、より高い精度で輸出先が求める高規格品を出荷している点である。

先述したように、生鮮の切花及び花芽（その他のもの）で輸出額が多く春節需要がある香港・ベトナム向けでは、JA庄内みどりのみで1～2月期の輸出額全体の1～2割弱を占めていることから、同JAの取り組みは日本産花きの輸出動向に大きな影響を与えていると推察される。そのため、嗜好性が高く高品質品が求められる花きの輸出においては、JAと花木専門部長のような高い栽培技術を有する生産者が連携し品質を担保するという取り組みが重要になる。また、高い栽培技術を有する生産者を育成することで、今後の突発的あるいは長期的な輸出増、輸出先市場での品質面でのクレーム対応に備えていく体制も必要になる。

最後に残された課題について指摘したい。本稿ではJA庄内みどりに焦点を当てたが、その取り組みが県内でどの程度見られるのかについて明らかにするためには、他のJAに対しても調査していく必要があるだろう。また、本稿は輸出時期が1～3月期に集中する国・地域向けのうち、香港及びベトナム向けの輸出を事例対象とした。日本の切花及び花芽輸出の動態の全体像をとらえるためには、主に中国向けを中心とする时期的な集中が存在しない輸出事例を相対的に検討する必要がある。さらに、特定時期に集中する要因は、個々の地域にそれぞれの個別要因があると想定され、網羅的な単一の理由では説明しきれず、各々の地域の需要構造を個別に確認していく作業が必要となる。米国など香港及びベトナム以外の国・地域向けの輸出についても別途調査を試みたい。

註

- (1) ここでの切花及び花芽全体とは、統計品目番号0603に相当する「切花及び花芽（生鮮のもの及び乾燥し、染色し、漂白し、染み込ませ又はその他の加工をしたもので、花東用又は装飾用に適するものに限る。）」の項目のものを指す。
- (2) 酒井・浜西（2019）や酒井・浜西（2020）、酒井・浜西（2022）では、山形県内の啓翁桜の生産実態が示されており、生産者の高齢化、生産者による品質のばらつきといった課題も指摘されている。
- (3) 管内では水稲からの転作作物として啓翁桜が選ばれるといったこともみられる。さらに、近年では法人の啓翁桜栽培への参入もある。
- (4) 出荷額と数量に関する数値は2021年12月から出荷が終了した2022年4月までの合計値である。啓翁桜の出荷時期は2か年に跨るため、本稿での年期とは前年12月から当年4月までを指す。
- (5) オークネットAGは、オークションを中心とした花き市場の運営を主な事業とする企業で、資本金は3,000万円、年間取扱高は75億円、登録者・出荷団体は3,300社、登録買参者は1,355である。
- (6) 主産地である山形県では、JA庄内みどり以外の一部の単協でも啓翁桜が輸出されている。よって、同県産を中心とする啓翁桜の輸出は、1～2月期における生鮮の切花及び花芽（その他のもの）の輸出でさらに高い割合を占めていると想定される。
- (7) オークネットAGを通じてJA庄内みどりの啓翁桜を輸入しているのは、香港ではこれまで一貫して1社のみであり、ベトナムでは2021年に新たな輸入業者1社が加わったことで2社になっている。
- (8) 香港での小売価格については、現地在住の調査協力者を介して得た。
- (9) JA庄内みどりが出荷する啓翁桜は枝が細い一方で、内陸部で生産されるものは枝が太い傾向があるため、県内で規格を統一してほしいという市場からの要求もあるが、各産地の特色が喪失することか

ら規格統一の動きはみられない。

- (10) JA 庄内みどり啓翁桜出荷規格では、125cm の場合、1 箱に入れる本数を 30 本と規定している。
- (11) COVID-19 の流行後は 90cm のものの割合も高まっており、この要因として、イベント需要が減少する中、家庭での観賞用の需要が高まったことが考えられる。また、両月以外をみると、2022 年は香港向けのみで 125cm の輸出額が 59.4 万円となっており、啓翁桜の輸出は 1～2 月期に概ね集中していることが分かる。

参考文献

- 程士国（2005）「日中花き業界の比較から見る対中輸出の展開とその問題点 ―花卉取引の現場から―」『農業・食料経済研究』第 52 巻 1 号、pp.65-74.
- 石塚哉史（2012）「八幡平市における切花輸出の現段階と課題に関する一考察 ―安代りんどうの事例を中心に―」『農村経済研究』第 30 巻第 2 号、pp.37-43. https://doi.org/10.11617/jrse.30.2_37.
- 農林水産省（2020）「花き産業及び花きの文化の振興に関する基本方針」<https://www.maff.go.jp/j/seisan/kaki/flower/attach/pdf/index-7.pdf>（2025 年 1 月 28 日参照）
- 農林水産省（2024）「花きの現状について」<https://www.maff.go.jp/j/seisan/kaki/flower/attach/pdf/index-50.pdf>（2024 年 3 月 25 日参照）.
- 酒井宣昭・浜西駿輔（2019）「山形県における啓翁桜産地の生産流通構造 ―JA やまがたと JA さくらんぼひがしねの例―」『東北学院大学東北文化研究所紀要』第 51 号、pp.17-37. <http://id.nii.ac.jp/1204/00024039/>.
- 酒井宣昭・浜西駿輔（2020）「山形県における啓翁桜産地の生産流通構造 ―JA 山形おきたまと JA てんどうの例―」『東北学院大学東北文化研究所紀要』第 52 号、pp.19-38. <http://id.nii.ac.jp/1204/00024552/>.
- 酒井宣昭・浜西駿輔（2022）「山形県における啓翁桜産地の生産流通構造 ―JA さがえ西村山と JA 庄内みどりの例―」『東北学院大学東北文化研究所紀要』第 54 号、pp.95-116. <http://id.ndl.go.jp/bib/032643878/>.

2024 年 11 月 15 日受理